

## 記憶の始まりからの物語：檀一雄「母の手」と太宰治「思ひ出」

長野，秀樹  
長崎純心大学助教授

<https://doi.org/10.15017/8482>

---

出版情報：九大日文．5，pp.302-311，2004-12-01．九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：  
権利関係：

# 記憶の始まりからの物語

— 檀一雄「母の手」と太宰治「思ひ出」 —

KAGAKO HIDEKI  
長野 秀樹

檀一雄が初対面以来まだ間がない太宰治にその天才を宣言したのは、数多い二人のエピソードの中でも、よく知られているエピソードの一つであろう。告げられた太宰も驚いたに違いないし、檀もまた、勇気のある発言であつたに違いない。

昭和八年、東京帝国大学経済学部在学中の檀は庄野義信という人物から、小説執筆を慫慂され、彼の創刊した雑誌「新人」に「此家の性格」を発表した。実質的に文壇でデビュー作となる此の小説を激賞したのが文芸評論家の古谷綱武であり、太宰を檀に紹介したのも古谷である。檀と一緒に外出しようとしている古谷のもとを、太宰が訪ねてきて、古谷の自宅のそばで、すれ違ったのがその初対面だという。そのときはあいさつしただけで分かれ、四、五日後、古谷から呼び出しがあり、家に太宰が来ているから来ないかという言伝で、檀は古谷の家を訪ね太宰と初めて会話を交わす。

そのときに、太宰の家の地図を書いてもらい、二人は古谷の家をでる。そのまま、太宰の家へ向かったのなら、話はわかり

やすいが、そうではなく、檀は一度自宅へ戻った後、手元にもらっていた地図を頼りに太宰の下宿をそのまま訪ねたという。

「飲まない？」

私は杯を受けた。夫人が、料理にでも立つふうで、階段を降りていった。

「君は——」

と、私はそれでも、一度口ごもつて、然し思い切つて、口にした。

「天才ですよ。沢山書いて欲しいな」

太宰は暫時身もたえるふうだった。しばらくシンと黙つている。やがて、全身を投擲でもするふうになり、「書く」

私も照れくさくて、ヤケクソのように飲んだ。

人はキザだと云うだろうか、然し私は今でもその日の出来事をなつかしく回顧出来るのである。

檀は「小説太宰治」の中で、そのときの情景をこう回顧している。檀が読んでいたのは、わずかに「思ひ出」と「魚服記」の二作品のみ。この二作品、あるいは初対面に近い太宰の何に天才を信じたのかを、檀は詳かにしないが、その才能を信じたことは間違いないだろう。ここで告げられた「天才」という言葉が、太宰を如何に震撼させたかは想像に難くない。たとえば、太宰の心情は後に『晩年』の帯への推薦文を求める山岸外史への手紙や、「水仙」の草田夫人をめぐる物語の中に顕著であるが、本稿では檀が太宰に天才を告げた、その時に読んでいた作品のうち「思ひ出」と檀一雄の作品「母の手」を取り上

げて論じてみたいと思う。

## 二

「思ひ出」の書き出しは、主人公「私」の自画像の最初の場面「だ」と考えてよいのだろう。「私」と作者太宰治の関係はひとまず措くとしても、登場人物としての「私」の原風景とでもいうべき記憶のページから、語り出されていることは間違いない。その書き出しを「黄昏のころ私は叔母と並んで門口に立つてみた。」と、叔母と自分との姿として書き出すことの意味の大きさも、すでに多くの論者に於いて述べられている。作者太宰治に即しても、また、主人公「私」に即しても、実母は存在している。にもかかわらず、語り手としての「私」は（作者としての太宰治も）、「私」の記憶を「叔母と並んで門口に立つ姿として、描き出していく。

「私は明治四二年の夏の生れであるから」、この最初の記憶は「数へどしの四つを少し越え」たところ、満年齢で言えば、明治天皇の崩御は明治四五年七月三〇日、大葬が同年の九月一三日のことであるから、三歳になったばかりであると考えてよい。そうした幼児が、叔母の「お隠れになつた」という言葉を受けて、「こへお隠れになつたのだらう」と「わざと」「尋ねて」「叔母を笑はせた」ということを、どう解釈するかは、判断がわかるであろうが、例えば、花田俊典氏は「ここにたとえは天性の道化者としての太宰治の資質をみてとることはまち

がってはいないだろうが、ただし彼にあっては、そういった自身の資質が意図的に見出されたうえで、さらに増幅して語られていることに留意しておく必要がある」と述べる。こうした虚構性は多分に書き出しに含まれており、その「自画像の最初の場面」として「黄昏のころ私は叔母と並んで門口に立つてみた」姿として自らを描き出す作業も「意図的に」行われていると考えてよい。

語り手の「私」は意図的、選択的に「語り手の現在」の「私」に相応しい記憶（作者の立場から言えば小説家太宰治に相応しい過去）を選び取ろうとしており、その記憶のページに相応しい記憶として「叔母と並んで立つ」姿は選ばれているのである。

「母の手」の語り手「私」もまた、最初の記憶から語りはじめる。「母についての最初の思い出というのはなんであろう」と語りはじめる「私」は「さまざまの印象や、記憶に残る若い日の母の面影の細片を、昔へ昔へと選び篩っていつても、「最初の印象、たとはつきり断定出来るような母の姿を思い浮かべることにはむずかしい」といいながら、その姿を「すくなくとも私を護るものがある」という形で定直し、次のように続けている。

悪童が二歳の私の目に向って発砲した。といつても、そんな情景を決して憶えているわけではなくて、目の中が突然真っ暗になっただけである。私は勿論泣き叫んだに相違ない。その時私の体をゆすぶり続ける、うに云われぬ優しい生命の庇護者があるという事をぼんやりと感じたことを覚えていた。それは有形の母の声でも姿でもなかつた。

そこに縋り得ると云う僅かに仄かな愛情の方向を感じ取つただけのことである。従つて、おぼろな生命の原始の混迷のうちから、私がようやく外界を意識し、自分を意識した

最初の記憶は母の愛情につながるものであつた。作品の冒頭で、「母についての最初の思い出」と限定したにもかかわらず、ここでは「私がようやく外界を意識し、自分を意識した最初の記憶」と述べることからわかるように、母についての最初の記憶は、そのまま「最初の記憶」として記憶一般の最初に記されるものでもあつた。しかもそれは「母の愛情につながるもの」であり、「生命の庇護者」、「私を護るもの」の存在を実感した時でもあつたというのである。

記憶の一ページを「生命の庇護者」としての「母親」を語る「私」は、いわば人生のスタートを幸福に切つたと言えるのだが、すぐにその不幸を語りはじめ。「やがて私は母というものが私の外にあつて、私に全然知られぬ様々な大人の不幸に喘いでいるのだという事を学んでいった。「私」はたとえば、「山陰の谿のほとりに咲き乱れる、百合の間」で泣く母の姿や、父に打擲される母の姿を語るが、決定的には「七歳の秋から、再会する迄の二十三歳の春迄と、十五年を超える空白の時間があつたのかを、決して「私」は語らない。両親の離別の理由については「後日私の父から繰り返かえし聞かされた」というが、「人々を結えてはほぐすこの見えない神威の力を畏れ」た、とその離別の理由を人知を超えた「神威の力」に依るとするのである。

作者である檀一雄自身の体験と比較すると、この間の「私」の体験と檀自身の体験とは重なる部分も多い事がわかる。たとえば、檀の母とみが檀たちを置いて、家を出て行くのは、大正一〇年九月のこと。檀は九歳。「私」は「七歳の秋から」というから、そこには二歳の差がある。しかし檀の体験に戻れば、最初に母親から離れたのは、小学校入学と同時にであり、数え年齢では「七歳」にあたる。この年、父参郎が青森の弘前工業の教師として赴任し、環境が変わりすぎるのをおそれた両親が、福岡県三井郡国分村（現久留米市）の母方の実家に預けたためである。だが、翌年には父が足利工業へと転任となり、両親と暮らし始める。

そして、大正一〇年九月、母は出奔する。母とみの心情はともあれ、檀は母に捨てられたのである。母の出奔の理由を檀は「母の恋愛事件である」と認識している。父との不仲はそれ以前から続いていたが、母に恋人が出来たことが、母を去らせたのだというのである。実際の別離の場面が「私」が語るようなドラマチックな場面であつたかは、後に検証することにして、ここで、確認しておきたいことは、檀が「私」という主人公に仮託しながら語る、その心情である。

何故、その記憶の一ページ目に「私を護るもの」としての母を置かねばならなかつたのか。それは「私を護るもの」としての母が私を護らなかつたということを、檀が知っていたからである。自らが、母に愛されていたという記憶を語ることに、それは裏切られた子どもの特権である。だからこそ、檀は自らの記

憶を「生命の庇護者」としての母を語るのである。ここにも自分の過去を「捏造」しようという意志を持つ者がいる。

もう一人の「捏造者」はいうまでもなく太宰治である。二人は合わせ鏡のように、お互いの姿を映し出している。実母がいたにも関わらず、叔母と夕暮れに門口に立つ姿から記憶を語り出す太宰と、実母は檀を置き去りにしたまま、出奔していったにもかかわらず、「庇護者」である母との記憶から語りはじめた檀一雄。あつたはずのものを失わされていたかのようにふるまう太宰と、なかつたはずのものを持つていたかのように振る舞う檀一雄。その姿は、ことの当否を越えて、お互いの資質の差をよく映し出している。

### 三

筑後川の支流が右に折れて、椎の森と母の熟れる野原をくぐる。そのほとりに、私の母方の祖父母が住む野中の大きな別墅があった。

語り手である「私」は第三章の始まりで、このように語りはじめる。「私」の両親もまた、檀一雄の両親と同じく、「私を母の実家にあずけたまま弘前へ移り住」むのである。檀一雄自身について述べるならば、母方の祖父とは本戸米吉のこと。本戸米吉については次のような資料がある。

本藤米吉 国分村

万延元年十月十一日久留米市京町に生る。(旧藩時代砲術及び柔術の指南家) 明治十一年久留米師範学校を卒へ、元上妻郡山内中学校及び福島中学校に教諭となり十六年辞職、翌十七年本県庁に奉職す。爾来好んで土木学を自修し、得るところあり。二十九年職を辞して筑後鉄道の測量及び、久留米福岡其他県下著名地の下水溝設計に従事し、好評あり。三十二年再び県庁に入り、筑後川遠賀川等の河川台帳作成に関する測量事務を掌り、また耕地整理基本調査甘木事務所長となる。四十三年国分村民の懇請に応じ、官を去りて同村長に就職す。

国分村長に就任したのが明治四十三年十一月、辞職するのが大正七年十一月である。檀があげられたのが大正七年の四月であるから、このとき米吉は五十八歳である。檀が住むことになったのは、「私」と同じく、筑後川の支流である高良川のほとりに立っていた本戸家の下屋敷である。現在の地番でいえば、久留米市野中町上の原二五一番地。地元の銀行である筑邦銀行の研修所になっている辺りがその場所である。檀はこの場所を舞台にしていくつかの作品を書いている。たとえば、「天明」(現代) 昭和十九年五月(六月)。

太郎。おまへは物心がついたならば、必ず一度は父が育つた揺籃の天地をたづねるがよい。久留米の忠霊塔の真下にある高良川に沿うた大きな森の家が、私が四歳から九歳迄をくらし忘れられぬ故里である。

(中略)

太郎。野中の父の幼年の日は淋しかったよ。林の中に毎夜ふくろうや五位鷲が啼いて、辺りを包む虫の声は一夜のうち私をとりこころして終ふほどだった。私は一人で寝かされていたから、嵐の夜に櫓や榎の原木がぎいぎいひしめくおそろしさは、おそらく、今のどんな子供達に伝えてもわかるまい。

「太郎」とは檀の長男が想定されている。昭和一八年八月一日の生まれで、後に「リツ子その愛・その死」の「太郎」のモデルともなる。「天明」は「太郎」へその父が話しかけるといふ形式をとり、いわば、檀から太郎への遺言という趣もある作品となっている。その意味では、「母の手」よりも、さらに檀自身の体験に密着している作品であるという側面もある。

そして、ここに描き出されている祖父父母の家の状況は、「母の手」で「私」が語る状況とおおきく異なっていない。別の箇所では「私は祖父父母と、一緒に寝たことも、入浴したことも、食事を共にしたこともない」とも述べるし、続けて「一人で箱膳を据え、板の間に端座して自分の食事を畢るのが慣はしであった」と述べている。こうした姿は「母の手」の中で、「私」が「私は勝手の次の間の板張りの上に座を敷いて、同じように、一人、箱膳で食べていた」という姿と重なるのである。このように「母の手」の中で、祖父父母の家に預けられた「私」が語り続けるのは、祖父父母とはある距離を保たざるを得ない孤独な少年の姿である。彼は決して愛されていないわけではない。しかし、祖父父母との間に母と子をつなぐような濃密な関係はなく、

「私」が親しむのは、彼の周囲をとりまく自然でしかない。

時に彼は「一人小川を際限もなくさかのぼり、「その淵におどりこんで、自分の体を清い水にもみつくすようにしておよぐ」し、「世の少年の十倍も雑草を喰べる術を知っている」と誇り、「水撲を掛けて、小鳥を待った」という。「四十雀や頬白が梢の葉々を掠めて囀り寄ってくる」瞬間を木陰に身を潜めながら待つのである。「私ははげしく快活になって」「浮くような軽い足取りで野山を駆けめぐった。人事を超えて、自然との交歓の中で、母と離れてくらす寂しさを耐えようとしている少年の姿がここに描き出されていると言ってもいいし、環境に負けないとする克己心に富り、精神性に傾いた少年の姿が描き出されていると言ってもいいであろう。

但し、檀一雄に即して、考えるならば、こうした自然との交歓は久留米の祖父父母の実家における体験もだが、母が出奔の後も父と暮らした、足利市での体験の方がより大きいと思われる。父は足利市西宮町の長林寺という寺の離れを借り、そこでくらしていた。長林寺は両崖山という山の三方を囲まれ、自然には事欠かなかった。

寺は両崖山に続く尾根の内懐に抱かれていて、すぐ真下に殿岡の織織工場がそろそろその小規模な工場を設立した間際であったが、まだまだ大門から山道を抜けて古い池になり、池から梅林になる寺の界限はシンと鳴りしずまつて市中とは別天地の趣があった。

私はこの寺に移り住んでから、云ってみれば、一個の神

仙であつたと答えてもいいかもわからない。

エッセイ「じじばばの花」(「えきすぶれず日本通運」昭和39年4月14日号)の中で檀はこう述べ、「ツグミや、イスカや、ウソや、目白が、群をなして山の尾根をかけ渡る」、その小鳥たちを水撥で捕まえる時の興奮を回想する。年譜等に依れば、檀が母方の実家に預けられたのは、大正七年四月から翌大正八年の夏頃までと、大正九年の五月から半年ほどである。実際に檀が通学した福岡県三井郡国分男子尋常高等小学校(現在の久留米市立西国分小学校)に残る学籍簿では、大正七年の四月に入学したことが確認される。保護者は本戸米吉。四月二日に入学し、翌大正八年九月九日付で、「原籍山門郡沖端村沖端八一番地へ復帰」のために退学している。学籍簿には大正九年の五月から半年ほど、同校に在籍したという記録は見られない。あるいは短期間であつたため、記録に遺漏があるのかも知れない。

とまれ、通算しても祖父父母の家に預けられた期間は二年ほどであり、その二年間が与えた印象の深さは別にして、実際に、檀が自然に親しみ「一個の神仙」として山の尾根を駆け回つたのは、足利での体験であつたと考える方が自然ではあろう。

しかし、それにしても「私」は、自然との交歓を語るに急で、ほとんど人間との交流を語るうとしない。母との別離を語るほかには、僅かに母と見まごうた女性の思い出を語るのみである。先に、わたしは作品の冒頭部を引用しながら、「母の手」と太宰「思ひ出」の類似と差異について述べたが、自然との交歓を語り続ける「母の手」と「思ひ出」との違いも明確である。

言うならば「思ひ出」は人事についてしか、語らないからである。たとえば、冒頭近くで語られる「村から二里ほどはなれた或る村」で「見た滝」との思い出も決して滝そのものの思い出ではない。主人公「私」は「そこで見た滝を忘れない」というが、実際に彼が記憶しているのは、滝そのものよりも、その社にかかつていた絵馬であり、「叔母」が毛氈に足を引っかけてよるめいたのを、周囲の人間にはやし立てられ、それが悔しくて「大声を立てて泣き喚いた」自分の姿である。

「裏の空屋敷には色んな雑草がののんと繁つてゐたが」その場所も「私」が「弟の子守から息苦しいことを教へられ」る場所ではないし、「ほくさの四つ葉」も邪魔な弟を追いやるための手段ではない。「私は小鳥の卵を愛した」というが、「燃えるやうな緑」をした「さくらどりの卵」や「可笑しい斑点のある卵」を手に入れるために、「私」は学校の生徒に「蔵書を五冊十冊とまとめて与へ」、その「秘密の取引」が露見しないように、兄に嘘を吐き続けねばならなくなる。

昆虫採集の思い出も兄が珍しい昆虫だと言つてくれた虫が、ただのくわがたむしであるのを知りながら、「珍昆虫十種」の中に入れて教師へ提出したという人情話にすり替わるし、勿論、葡萄棚もみよとの思い出の場所としてその意味を持つのみである。このように見てくれば、「思ひ出」の主人公「私」は、なんと人と人事を愛し求めていたことか、という感慨すら抱きたくなるほどである。

それに比べて、「母の手」の主人公「私」には、大きな断念

があるといつてよいだろう。作品の冒頭に母から愛されていたという記憶から語り起こしながら、その母に直接、接近することで、母の愛に甘えようとする方法を「私」は断念している。

ある日「私」は「堤池を越えた先の村」で、大きな屋敷の庭に忍び込んだことがあると語る。そこには、金魚の養殖場があり、「その睡蓮の池のふちに、一人の女が浴衣のまま、水の中をじっと覗いてい」るのを見つめる。三十を少し越えたぐらいのその女は池を「覗きながら」、「はげしくせき入つて、突然ハシケチを血潮で真赤に染め」るのである。「あれが母だとそんな不思議な幻覚が、青みどろの中の水と一緒の胸の中にしゅうねくこびりついて離れない」が、「それ以後はおそろしくて決して其処へは行かな」いし、「もう私は現実の母の名をよばない」と宣言するのである。「私」は個体としての「母」と「子」の関係を越えて、生命の連続としての「根源に帰依すればよい」というのである。

もちろん、こうした「解釈」は語り手の「私」が「語る現在」において抱いているものであり、決して、少年の日の「私」が抱いていたものではないが、当時の「私」の有り様を「現在」の「私」が「解釈」していることも確かなのである。だが、それは母を拒否しているということではない。母はその別離を告げるとき、「私」を呼び、一冊の雑記帳と二十四色の色鉛筆を与え、そこに「艱難汝を玉にす」と記したという。また、その漢字を読めぬ「私」に読み聞かせながら、母は次の言葉を私に告げる。

カンナンというのは苦しいことですよ。辛いと思うことですよ。ナンジヨというのは神様がきつと一雄さんということですよ。タマニスというのは美しい玉のように磨き上げるといことですよ。悲しいと思うことに、負けてはいけませんよ。神様はそんな弱虫にはお力添えをなさらない。

この後、「私」は「成長迄の十五年の間、絶えて母に会わなかった」という。こうした別れが、いわば「私」の行動を規制していたのは間違いない。濃密な人間関係につきまとう甘えを拒否し、「私に友人は一人もなかった」と語る「私」には、この母の言葉が常に意識されていただろうし、孫との間にも距離を置く祖父母の存在が、そうした考えに拍車をかけたであろうことは想像に難くない。

もちろん、檀一雄の母がこうした形で残していこうとする子へ、直接的にこれらの言葉を贈ったわけではない。檀の母が出奔するのは先にも述べたように、足利市の長林寺に暮らしていた時のことであり、祖父母と暮らしていた時ではないし、檀の母高岩とみによれば家を出て行くとき、檀は学校へ行っており、その隙に生後一年ほどの子久美だけを連れて家を出たという。但し、檀の机の上にあったノートに別れの言葉として「艱難汝を玉にす」という言葉と「獅子は子を産んで三日を経る時数千丈の石壁よりは是を投ぐ」という言葉を書き残したという。

#### 四



「母の手」の最後は「私」と母との再会後の後日譚として閉じられる。ここにも「思ひ出」との類似があるだろう。「思ひ出」が、みよが主人公の家を去った後、「私」が蔵で見つけた、みよと母、叔母が写る写真を見る場面によって締めくくられるように、「母の手」では、「私」が祖父からもらった数珠について母と語らう場面で閉じられる。「思ひ出」の最後の場面は末尾の一文「私は、似てゐると思つた。」という一文をめぐって、様々に議論されているが、花田俊典氏は「私」の視線の動きが母から、「ついで」顔から胸にかけての輪郭がぼつとしてゐる「みよ」へと注がれ、さらに「叔母」の胸（帯の上）から「まぶしそうにしてゐる顔へと移動する。そうして「私」が「似てゐると思」うのであるから「似てゐる」のは、「みよ」と「叔母」というほかならう」と結論づけ、さらにこの場面に、みよと主人公との間に血縁関係をみる見方や、主人公を叔母の子であるとする「不義の子」妄想を退けた後のように述べている。

「顔から胸にかけての輪郭がぼつとしてゐる「みよ」の写真は、彼女の無名性もしくは匿名性の比喩である。個別的な出来事としての「みよ」の喪失は、つまり普遍的な体験のサンプルなのであつて、それは「私」にとつて至福の幼年期の奪回がついに不可能でしかないと告げている。けれども「思ひ出」が企図しているのは、そのような手続きをとることによつていわば奪回不可能な憧憬として

幼年時代の至福を絶対化し、それと引きかえに現在の「私」を「私」の立つ現実の側へと引き据えること、「思ひ出」を一篇のベクトルは、すべてここへと収斂していく。花田俊典氏はこのように述べ、さらに「太宰治が企図したのは、「私」の（それから）の物語にほかならない」と結論づけている<sup>10</sup>。

こうした、「思ひ出」の終わりに対し、「母の手」もまた、象徴的な終わり方である。「十歳の夏の日に」「私」は父方の祖父母の家に移される。「或る朝、祖母が納屋の中で縊れていた」からである。祖父はその時に「何を拝むことも要らぬ。ただ肌身を離さず持つておれ」といつて、数珠をくれる。

この数珠を再会の日、母に見せると母は「これは先祖の方が天草を追われた日にお掛けになっていた数珠だったと聞いています。お祖父様が日清戦争にもお持ちになつた数珠ですよ。この白い真中の玉に、たしか天草の頃のマリア様がかくされていた筈でした」と言い、その白い玉を開けようとする。「母は繊い指の先でひねっていたが、白い玉は開かなかつた」<sup>11</sup>。

もちろん、ここでは開かない白い玉が失われた少年の日の比喩であることは間違いないだろう。「母の手」の「私」の少年の日も再び、私の前に現れることはない。それは一般的にそうだと意味ではなく、私の「至福」の時は、祖父母の家とその周囲の自然と分かちがたく結びついたものであり、祖母の自殺によつてその夢は瓦解した。しかもその「至福」の時は「私」の孤独によつて支えられており、母と再会を果たしたいま、そ

の孤独は同じような形では、もはや「私」には訪れてこないであろう。記憶の始まりに布置された「庇護者」としての母との再会は、孤独な少年期の代償として与えられたものではない。むしろ逆に、母との別離の代償として、の少年の日々の「至福」が与えられたのだった。そして、その日々は二度と帰っては来ない。「母」の「緋い指の先でひねって」も再び、開くことも無しに「マリア様」を蔵す、その白い玉は少年の日々の比喩として十分に美しい。

檀一雄「母の手」はもちろん、「思ひ出」のパロディとして成立する作品ではない。だが、たとえば、表面的に見るならば「思ひ出」が「叔母」から始まり「叔母」で終わる物語にも見えるように、「母の手」は「母」から始まり「母」で終わる物語とすることもできる。そうした意味も含めて、「母の手」を執筆する作者檀一雄の視野の中に「思ひ出」が入っていたことは確かであろう。

本論の冒頭で述べた太宰治との初対面以来、檀にとつて太宰治との出会いは、人生を決定したといつてよい出来事であっただろう。実は、この小論でわたしが述べたかったことは、そうした出会いが確かにあったのだという、そのことだけだったのかも知れない。

付記 本論には行文の都合上、拙稿「大きな森の家―檀一雄の久留米時代(一)―」(『文献探究』二五号 平成二年三月)の内容と重複するところ

があることをおこわります。

注

- 1 初出は「新潮」昭和24年7月号、8月号。後に加筆して『小説太宰治』(昭和24年11月 六興出版)。引用は『檀一雄全集第七巻』(昭和52年10月 新潮社)による。
- 2 太宰は昭和11年6月27日付山岸外史宛葉書で「帝大新聞へ大きく「晩年」の広告だします二枚のスイセンのお言葉、大至急速達にて、下谷区上野桜木町二十七の砂子屋書房あてに、たのみます。「天才」くらゐの言葉、よどみなく自然に使用ください」と依頼している。また、「水仙」については拙稿「水仙」論(『太宰治研究』10号 平成14年6月)を参照頂ければ幸いである。
- 3 花田俊典著『太宰治のレクチュール』(平成13年3月 双文社出版)
- 4 前記、花田俊典氏の論の他に山内祥史『「晩年」』(『作品論太宰治』昭和49年6月 双文社)は、「叔母と並んで門口に立つイマジユは、太宰治の魂の底に灼きつけられた、まぎれもなく逃れがたい、宿命的イマジユであった」と論じる。
- 5 注3に同じ。
- 6 「母の手」の初出は「知性」昭和17年11月号。同題の短編集『母の手』が昭和45年3月に皆美社より刊行されている。引用は『檀一雄全集一巻』(昭和52年9月 新潮社)によつた。
- 7 「わが青春の秘密」(『小説新潮』昭和35年1月号から12回連載)。引用は『わが青春の秘密』(昭和51年4月 新潮社)によつた。

8 『御井郡人名辞書』（小俣愨編集兼発行 大正2年）

9 「火宅の母の記」（第一部の初出は「新潮 昭和52年10月号、第二部は書き下ろしで、昭和53年9月、新潮社より第一部とあわせて刊行。引用は初刊によった。

10 注3に同じ

11 久留米藩の『御家中略系譜』巻五によれば、檀一雄の母方の実家本戸家の祖は彦左工門といい、肥前島原高力撰津守につかえ、寛文八年高力氏

が改易になった後、浪人し延宝二年長崎において死去している。その子喜左工門正行の時に久留米藩に召し抱えられ、さらにその子丹工門正晴の時に二三〇石の録を得ている。天草・島原の乱が寛文一五年であるから、直接的に関係するかどうかは不明であるが、島原高力家に仕えたというのであれば、潜伏キリシタンであった可能性がないわけではない。

（長崎純心大学助教授）